

畜生成佛の可能性の限界

浅田信久

大乘仏教の中心問題は云うまでもなく、成仏と云うことにある。成仏とは無明煩惱に苦しむ我々が、仏道を行することにより、煩惱を断り、正覺を成ずることを意味する。然し成仏という言葉の持つ意味、或は成仏えのフ口セスとしての修行方法は、經典や宗派によつて種々に異なる。今本稿に於いて取り扱う畜生成仏の可能性も、これが為種々複雑な問題を提起している。

法ヶ経は二乗作仏、難々成仏等を説いて、十界皆成仏道の旨を明した教として有名である。一念三千の法門からすれば、諸經に於いて永不成仏と云われた声聞、緣覺の二乘や五障の故に成仏せずと言われた、女人の成仏を説くのは当然である。十界の衆生の中、一界でも成仏し得ぬならば、十界五界一念三千の法門は、成立しないからである。従つて畜生界の衆生も亦、成仏する筈のものである。否、法ヶ経は有情の成仏のみでなく、非常即ち草木國土の成仏をも許す經典で、一切皆成の教である。

それでは法ヶ経の成仏思想に於いては、畜生成仏の可能性に就いて、何等問題がないであらうか。理學品の竜女成仏は、本来、女人成仏の例証として、尊重せられたのであり、此れが畜

生成仏の例証として、真鈔に論義されたのは、本門法々宗に於ける三途成不の論争の文証としてであつた。三途とは地獄、餓鬼、畜生の三趣を云う。此の三途に墮して苦しんでいる先祖に對して、その子孫が至心に回向をした場合、紐力により即身成仏を遂げられるか否か、と云ふことに端を差した此の三途成不論は、数十年の長きに亘り論争が続けられたのであつた。時は恰も幕末から明治にかけての動乱期であつた。かゝる社会背景を考えずしては、どうして此の論争の性格は、把握されないものであるが、今は單に畜生成仏の可慧性の限界を考察するに止めるのであるから、此の論争が華々しく、繰りひろげられた舞台背景の考證は省略する。

成仏に種々な意味があることは、前に一言したが、本稿に於いて問題とする成仏は、此の身このまゝ、成仏、即ち即身成仏に限定されることを承知されたい。何故かすれば、教義の成仏の可慧性であれば、三途の成仏も勿論可能であり、論議の對象とならぬからである。

三途の中、地獄と餓鬼の二界は、冥界であつて我々の肉眼で認められないが、畜生は頭再にあつて、論議の具體的對象となり易い。そこで二界はさておき、畜生が即身成仏であるか、どうかと云う所謂、畜即成不論が、かわされること、なつた。

法々經本門の教説——八品教説に於いて論じる所の成仏は、まづ仏種子を問題とする。これは、種、熟、脱の三益の上に論じられることで、種子なくしては、その熟も脱もありえない。成仏とは仏の種子を衆生の心田に下種せしめることであるとする下種學が、日蓮教學の根本と可するものである。

八品教説にあつては、下種即脱を主張する。そこに即身成仏が窺われるのである。したがつて、即身成仏を云う場合、必ず下種の有無、可能、不可能が問題とされる。

下種は題目口唱行によつて、本尊から下されるもので、主観的仏性の開発ではなく、そしてその口唱行は、主観から發揮する信心の現れではなくればならぬと主張する。下種の完成したものが成仏であり、下種は成仏そのものである。と云うのが八品教義に於ける即身成仏なのである。

そこで、畜生の成仏（即身成仏）の可能性を論ずるには、畜生に対する下種の可能性を論ぜねばならぬ。畜生とて一念三千の理論上からは、仏性を有するから成仏する筈だが、たんに仏性を有すると言うだけでは、成仏と云う結果は出てこない。それだけ拾も玉を磨かなくては、瓦石と可んら異る所がないのと同じである。磨いてこそ玉の光は出てくるのである。仏性も修行の磨きをかけてこそ、成仏と云う光を放つ力である。つまり性徳と修得の二つがある。畜生と一切衆生悉有仏性の立錫からは性徳である。その仏性を磨きあげる力が修得である。ところで畜生に修得が可能であらうか、修得——下種修行は人間のみが可能であつて、畜生は不可能である。やや猫が菩薩行を出来るわけのものでなく、修得は徒勞である。此の義に畜生成仏の可能性の限界は、置かれるのである。

そこで、畜生は畜生そのまゝでは、成仏しうるものではなく、十界の中では人界のみが、下種を受ける機であり、修行が可能であり、即身成仏を成就するとされる。かゝる範疇に立てば、そこに当然、人間性（阿耨多羅三藐三菩提）の自覚が生れ出るはずである。これを人一思想と云う。

人一思想は人間だけが、成仏する人だと云う特種意識ではなく、人間でなければ成仏出来ないのだと云う、自覚を呼び醒すものである。畜生成仏の限界がやがて、人間性の自覚を展開していった所に、維新仏教の歴史的一流があつたと、わたしは見ている。

以 上